

神田外語大学紀要第 29 号
抜刷 2017 年

The Journal of Kanda University of International Studies Vol. 29 (2017)

ドキュメンタリー映画『ウリハッキョ』をめぐる
三つのコミュニティの考察：
韓国、日本、在日コリアン社会のダイナミズム

ペク ソンス

ドキュメンタリー映画『ウリハッキョ』をめぐる 三つのコミュニティの考察： 韓国、日本、在日コリアン社会のダイナミズム

ペク ソンス

要 旨

ドキュメンタリー映画『ウリハッキョ』は韓国人の視点で日本の朝鮮学校を描いたものである。この映画は韓国人に今まで無知だった朝鮮学校について同じ同胞としての関心と新しい見方を要求した。映画の観客の中には北朝鮮抛りの政治的偏向性を批判する意見もあったが、多くの韓国人にアイデンティティ・民族・祖国・統一などを考えさせる感動的な物語として受けとめられた。この映画がきっかけで、「モンダン鉛筆」という市民サークルが生まれた。韓国人の「モンダン鉛筆」と在日コリアンの「朝鮮学校」と朝鮮学校を支える「日本人教職人グループ」の三者は同じ問題意識をもって連携している。この活動がお互いの信頼関係と外部に開かれた態度の上で行なわれる限り、その存在意義は大きい。特にナショナリズムが高潮し、国と国が衝突し、多くのことが国家レベルに回収される時期や大きい理念がマイナーな意見を抑圧する時、このように国を跨いでつながれた人々の関係や国境を越えて成立するマイノリティーの連携は、国と国の衝突の軸をずらし、社会の多様性を保ち、別の展開を開ける可能性になるということとでその意味は大きいのである。

1. はじめに

「モンダン鉛筆」（日本語で「ちび鉛筆」）は「朝鮮学校と一緒にいる人々」を

キャッチフレーズに韓国で作られた市民サークルである。ドキュメンタリー映画『ウリハッキョ』(日本語のタイトル: 私たちの学校、英語タイトル: Our School)のファンクラブの人たちが中心になって、「3・11」で地震被害を受けた東北の朝鮮学校を助ける活動がきっかけとなって結成された。その「モンダン鉛筆」の会員たち40名と韓国の俳優、歌手、ダンスグループで結成された公演団が2014年7月に広島・四国の朝鮮学校を訪れた¹。「ソブン(遠足)」と称するこれらの活動は北海道、東京、大阪に続き、この年で4回目であった。初日には公演団と広島朝鮮学校の学生らとのコラボレーション・コンサートが行なわれ、2日、3日目は朝鮮学校を訪問するという日程であった。訪問者の中には今回の「遠足」が初めての人もいれば、既に複数回参加した経験者もいた。

この活動の原点である『ウリハッキョ』はキム・ミョンジュン監督によって2006年に作られたドキュメンタリー映画である。この映画は2007年に韓国で公開され、当時のドキュメンタリー映画の入場観客記録を更新する話題作であった。在日コリアンに関する映画は戦後日本人または在日コリアンによって持続的に作られてきた。しかし韓国においては無関心または現実的な壁によりほとんど作られてこなかった。2000年以降、韓国でも日本の在日コリアン関連のいくつかの映画が紹介されるようになるなかで、『ウリハッキョ』は韓国人監督によって作られ、興行的にも成功した先駆的な作品となったのである。

それなら『ウリハッキョ』は韓国社会にどのような問題を提示し、またそれは韓国社会でどのように受けとめられたのか。そしてこの映画は鑑賞と討論を越え、どのように具体的な社会活動につながり、在日コリアンと韓国人と日本人の関係性にどのような新しい可能性を示唆したのだろうか。この論文では二つの段階でこの問題を問いていく。第一には韓国人による「在日」の再発見としての『ウリハッキョ』をめぐる諸問題である。ここでは映画における「在日」への視線を

¹ 2014年7月4日-5日は広島、6日は四国の日程

分析する。第二には韓国人と在日コリアンと日本人、それぞれの視点から「モンダン鉛筆」の市民活動の意義を明らかにし、これらの関係における実践的な可能性を展望する。

社会的メッセージ性を持ち、ある一定の影響を与えた映画に関する研究は持続的に行われてきた。その意味でこの研究はその流れに属するものである。しかしながらこの論文は映画の分析に止まらず、映画の影響を受けて生じた市民活動を対象にし、その活動に関わる三者間のダイナミズムを語ることに意義を見出している。

方法論としては以下のようなものが用いられた。第一に映画のシーケンスことのキーワード分析が行なわれた。抽出されたキーワードの内容を吟味することで、その映画の問題意識と視点を明らかにした。第二は参加観察法である。著者は「広島遠足」に訪問団の一人として参加し、エスノグラフィック・インタビューをしながら観察したものをもとにこの活動の意味を推論している。第三はインタビュー法である。インタビューは「遠足」が終わってから、日本では広島朝鮮初中高校の関係者（校長、職員一名、PTA 委員二名）と日本人関係者一名、韓国では「モンダン鉛筆」関係者四名のインタビューを行なった。これらのインタビューは各立場による問題意識と意見の共通点と相違点を明らかにし、全体の状況をより立体的で鮮明にするためのものであった。インタビューは焦点インタビュー方法で行なわれ、すべては録音され、後に文字に起こされたものが使われた。

2. 在日コリアン映画と『ウリハッキョ』

2-1. 在日コリアン映画

日本で在日コリアン²を描いた映画は多数ある。門間（1994）は戦前の日本映画

² 韓半島から来て、日本に住む人々の呼び方はいろいろある。この論文での在日コリアンは1980年代以前に来たオールド・カーマー、特に総連系の在日コリアンを指している。引用などのために総連系の在日コリアンを在日朝鮮人とする場合もある。

では朝鮮人は日本人が保護すべき人たちとして描かれたが、戦後になってからはある種の映画において在日朝鮮人という存在は貧しくとも清く正しく前向きに生きている人たちになったという。また彼は1970年から1980年の間で日本映画における在日朝鮮人像は多様化したと説明している。梁(2004)は1970年以前の社会派映画が描いた在日が現在の在日表象の原型になっていると主張した。梁はまた日本社会は文化表象のなかで、「自分たちだけの空間」を作り出すために「他者」として「在日」表象が必要であったし、日本の映像メディアは、国民国家が「同質の人々で構成される国家である想像力を文化的表象のレベルにおいて修正しつつ、補強してきたのではないか」と問いかけた。

自画像としての在日コリアン映画は李学仁の『異邦人の河』(1975)が始まりであった。今まで日本人に撮られてこなかった在日コリアンの自意識と日常が描かれるようになったのである。金佑宣の『潤の街』(1989)と小田切正明の『金(キム)の戦争』(1992)を経て、崔洋一の『月はどこに出ている』(1993)は日本社会において在日コリアン映画がメジャーなものになる可能性を開いた作品になった。その後も金守珍の『夜を賭けて』(2002)、崔洋一の『血と骨』(2004)、井筒和幸の『パッチギ!』(2004)、『パッチギ! Love & Peace』(2007)のような商業映画が多数発表されているだけでなく、卒業作品として『青〜Chong〜』を制作した李相日のように多くの在日コリアンたちが日本の映画制作現場で働いている。

同じく在日コリアンに関する数多くの記録映像やドキュメンタリー映画が作られてきた。ドキュメンタリー映画としては辛基秀の『解放の日まで在日朝鮮人の足跡』(1980)をはじめ、呉充功の『隠された爪痕 関東大震災朝鮮人虐待記録映画』(1983)などがあった。また呉徳洙は在日外国人に対する差別と管理の象徴であった外国人登録法の指紋押捺制度に対する運動を描いた『指紋押捺拒否』(1984)を発表して以来、在日を多面的に捉えていく膨大な作業に着手し、戦後在日50年を記念して『在日』を制作した。このドキュメンタリーは在日史のみならず、戦後日本史とも評されている。

野澤和之の『HARUKO』(2004)、原村政樹『海女リャンさん』(2005)など日本人によるものとは別に、梁英姫の『ディア・ピョンヤン』(2006)、『愛しきソナ』(2011)、『かぞくのくに』(2012)、朴英二の『まとう』(2010)、『蒼のシンフォニー』(2015)のように在日コリアンの若手による作品が持続的に作られている。

在日の自画像は時代や相対的な自己認識によって多様化してきた。例えば初期の映画が民族や在日が抱える問題を主なテーマにしたのに対し、李鳳宇(1994)は自分の映画は在日朝鮮人を映画の対象として描くのではなく、描かれる人物の背景として在日があるわけで、どっこい生きている普通の日本市民として描くのであると話した。

このように日本の映画に登場する在日コリアンは日本人によって描かれる場合もあれば、在日コリアン自身によるものもある。商業映画もあれば、ドキュメンタリー映画もある。時代によって、在日の描き方は変わってきたし、それは現在進行形として、在日コリアンの存在は映画のなかで再解釈され、表現し直されているのである。

2-2. ドキュメンタリー「独立映画」としての『ウリハッキョ』

ドキュメンタリー映画は虚構ではなく、実在の世界を対象にするがために、フィクションと相対的な位置にあるものとしてノンフィクション性と非演出性と客観性を持つものとして思われた。リュミエール兄弟が日常風景をそのまま記録したことで、映像におけるリアリズム的感覚が確認されてから、ドキュメンタリー映画は多様な方法論と美学的進歩を積み重ねてきた。特に第3世界ではドキュメンタリーが民衆解放闘争の武器として使われた。民衆映画宣言文「第3映画に向けて」においては西欧帝国主義に向かうゲリラ映画運動の展開が明確に評された(Chung H 2013)のである。彼らはより積極的に現実介入した。映画産業に対抗する代案的様式を指向し、多様なジャンルと技法の結合を通じてドキュメンタリーの参与的、行動的特性を発展させたのである(Chung H 2013)。

これらの第3世界民衆映画運動は、韓国のインディーズ映画にも強い影響を与えたとされている。これらのインディーズ系の映画を韓国ではしばしば「独立映画」というが、その時の「独立映画」とは基本的に商業映画資本に依存せずに製作される映画を指すもので (Kim S 2005)、韓国独立映画協会は「身近く感じる現実を少し離れてみさせ、遠く感じる現実を近づいて観させることで観客が世相を新しくみ、よりよい自身と社会を夢見るようにする映画」³が「独立映画」だと語っている。特に1980年代に政治的闘争と社会変革運動の動力として機能した映画であり、1990年代以降、社会全般でみられる脱政治化とデジタルメディアの普及などによるメディア地表変動のなか、より多様な内容と形式のものを包括することとなった。現代においてマス・メディア的な体制の商業映画と独立映画の境界が入り組んでいくなかで、独立映画のアイデンティティを保つのは「どこからの独立か」より「なんのための独立か」⁴が大事である (Kim J 2008) とされている。

キムの『ウリハッキョ』は韓国におけるこのような流れに沿っているといえる。韓国社会に在日コリアンの現状を見せ、この問題に対し無知な韓国社会に別の見方があることを訴えることによって、「小さい真実のために小さいカメラを正照準すべき」⁵とする「独立映画」がなんのための映画であるかを示したい事例となったのである。

『ウリハッキョ』は7万人の共同体自主上映会の観客を含め、10万人の観客を動員し、韓国のドキュメンタリー映画史上、最高記録を達成した。韓国のインディーズ映画環境はとても劣悪であり、『ウリハッキョ』も全国で10カ所の上映館にかけられるだけであった。映画関係者たちは共同体での上映会に力を入れた。そしてネット上にはファンサイトが作られ、そこに集まった人々の中から、より積極的かつ自主的に共同体上映運動や宣伝活動を行う人々が登場した。「各

³ 韓国独立映画協会ホームページ「独立映画とは何か？」 http://www.kifv.org/intro_kifv/overview_02.html

⁴ 韓国独立映画協会ホームページ「独立映画とは何か？」 http://www.kifv.org/intro_kifv/overview_02.html

⁵ 韓国独立映画協会ホームページ「独立映画とは何か？」 http://www.kifv.org/intro_kifv/overview_02.html

地域で上映委員会が組織され、数十名が集まる小さい共同体まで直接出向く共同体上映が同時に進行された」(表 4 K.H) ののである。共同体上映運動の成功は映画の関係者たちとその映画に積極的に呼応したファンたちとの関係作りと協力によるものであった。

メジャーな映画会社の企画や資金によるものではないという意味でも、また韓国国内で疎外されてきたテーマ、つまり「在日」を取り上げ、彼らと私の関係を問い直すという独立映画的精神を受けついていることでも、そして映画館と共同体上映で 10 万人の観客を動員した上映体制からしても、『ウリハッキョ』は韓国の「独立映画」の中で最も成功したドキュメンタリー作品の一つである。そしてそれ以来、韓国社会で朝鮮学校に対する関心はすこしずつ高まり、朴思柔の『60 万回のトライ』(2013)やイ・イルハの『ウルボ 泣き虫ボクシング部』(2014)のような韓国人監督の作品に引き継がれた。

2-3. 『ウリハッキョ』の分析：三つのキーワード

『ウリハッキョ』は最初チョ・ウンリョン監督によって企画されたものであった。しかしながら彼女がその準備途中事故で亡くなり、彼女の遺志は夫であるキム・ミョンジュンに引き継がれた。この映画はキムが 2002 年から「北海道朝鮮初中高級学校で教員や学生たちと一緒に三年間を過ごし、みて感じたことを記録したもの」(表 1-1) (以下表は省略。イントロ 0.0.27-0.2.24 で引用された意味)で、朝鮮学校の状況が韓国人の映画監督の視線で描かれた最初の映画である⁶。今まで無関心を通してきた朝鮮学校の話題がこの時期に取り上げられるようになった時代的背景には、北朝鮮に対し和解政策を取る当時の韓国政権の雰囲気があった。韓国と北朝鮮間の変化は韓国人と総連関連の組織との関係にも影響し、以前は敵

⁶ これに先立て、2005 年に韓国のテレビ局 SBS は日本にある朝鮮学校を取材したスペシャル番組『私は行くよ-東京第 2 学校の夏』(나는가요-도쿄, 제 2 학교의 여름)の放送があった。この番組は韓国の視聴者に朝鮮学校の存在を初めて気付かせたものであった。2007 年続編『私は行くよ-東京第 2 学校の春』があった。

対視すべき相手とされた朝鮮学校に同じ民族として視線を向くことが可能になったのである。

『ウリハッキョ』は基本的にキムの1人称のカメラを使う。しかしそれにこだわるわけでもなく、場合によっては撮影対象者にカメラを渡し、彼らによって撮影された映像を使用する。撮影者と対象が入れ替わり、キムが撮られる場合さえある。人に質問し、ナレーションで説明する。彼は観察者であり、参加者である。また彼の視線は客観的ではなく、中立的でもない。韓国人のキムは朝鮮学校という親しい文化でありながら、どこか違う文化と対話しているのである。

『ウリハッキョ』をシーケンス別に分析した。その結果は表1であらわしているが、この映画の問題意識は以下の三つでまとめられる。

第一に朝鮮学校の歴史と存在意義である。これは朝鮮学校の関係者たちの視点からの歴史であり、意義である。キムの映像は朝鮮学校の様々な側面を映し出す。校長は「朝鮮学校の教員は総連の教育事業、総連の教育の働き手として在日同胞の子女に民族教育が出来るところは朝鮮学校だけなので、その観点で教育事業を行なうべき」(1-1)だと話し、朝鮮学校の歴史は「解放直後、在日同胞一世たちが我が言葉と文字を知らない子供たちが祖国に帰って不便がないように最初に学校を建てたことから始まり、祖国が分断される前まで5400あまりの朝鮮学校が作られ、今80あまりの学校が残っているが、韓半島の南の人々にとって朝鮮学校は忘れられた存在になっている」(1-1)と説明されている。

小学1年生から高校3年生までがこの学校でハングルを学ぶ。女子の制服はチマチョゴリだが、男子はブレージャーを着る。先生と学生と一緒に食事をし、布団を並べて寝る。日本の学校に転校する学生と日本の学校から編入してくる学生がいる。朝鮮学校を支える日本人たちがいて、ハラスメントする右翼勢力がいる。運動会には同胞が集まり、サッカーの部員たちは全国大会に向けて夏の合宿をする。北朝鮮への修学旅行で初めて祖国を実感し、卒業式ではいつでも帰ってこられる母校の存在を確認する。日本や韓国の学校と同じようで、どこかで明らかに

違う様子が次々と映し出されるのである。

学生は「学校がないと民族教育は当然なく、民族教育がないのなら、民族性も守れない。学校という場所は同胞が多く集まる場所だから、学校があることで同胞社会が堅実なものになる」(1-4) と答える。自意識や自己アイデンティティが成立される過程は人それぞれである。「自分が生きていることが知覚された時から、朝鮮人だと理解していた」(1-3)子もいれば、「自分が朝鮮人であることがいやで、嘘をつき、否定した」(1-9)子もいた。そして彼女は「私自身を知っていなかった。私はこの学校で友たちと仲良くなる過程でそれを知ることが出来た。ここの友たちは自分が朝鮮人だという意識をもち、立派な朝鮮人になろうとする意識が強いが、私は隠し、朝鮮人が嫌いで日本人になりたい心を持っていたことが、今はとても恥ずかしい」(1-9) と振り返る。「日本で民族性を守ることと南朝鮮で守ることはすこし違う」(1-14) と言う。「南朝鮮では内面的なものをしっかり守っている、守っていることになるが、我ら日本に住む在日同胞たちは内面でだけ守っていて、外に出ないと、それが徐々に内面にも浸透し、結局日本人と同じになります。そうなるのは駄目だから、チマチョゴリも着ないといけないし、我が言葉も守っていかなければならない」(1-14) のである。彼らにとって朝鮮学校は、祖国である北朝鮮と在日朝鮮人の同胞社会を結び、また世代をつなぐ求心点であり、自分のアイデンティティと民族性を確立させる拠りところなのである。

第二は北朝鮮と韓国に対する認識である。朝鮮学校の学生たちにとって北朝鮮は祖国である。北朝鮮へ修学旅行に発つ3年生に、後輩たちからトイレットペーパーがプレゼントされる場面は、彼らが北朝鮮の経済的状況や生活水準をよく理解していることを現している。しかしながら彼らの目に止まった北朝鮮は「我々の存在、在日同胞を歓迎してくれるところ」(1-14) であり、「人間らしい人間」(1-14) と「美しい人たち」(1-14) と「目が輝いている人たち」(1-14) がいる国であった。そのために、自分の「心が洗濯された気がした」(1-14) し、自分が「朝鮮人であることに誇りを感じた」(1-14) のである。北朝鮮の人たちに「在日

同胞として異国の地で民族性を守っている」(1-14)と褒められ、複雑な思いにもなったが、祖国に行って一番よかったことは、「堂々とチマチョゴリが着られ、堂々と我が言葉をしゃべり、我が歌を大きい声で歌っても誰もおかしく思わず、それが当然な様子であった」(1-14)ことであった。

キムは在日朝鮮人たちが「故郷は南だが、祖国は北」(1-14)と話す理由について、「学校が作られた初期、最も大変だった時から今まで、毎年教育援助費を送ってくれる北朝鮮の政府に比べ、南の政府は数十年間、棄民政策、つまり在日同胞のことは日本政府が決めるとする態度と各種のイデオロギー攻勢だけで一貫してきたからであり、このような事実が子供と先生たちに故郷は南だけど、自分たちを理解し、為にやってくれる祖国は北である認識をうえさせた」(1-14)と説明している。

朝鮮学校の学生や先生が北朝鮮に対して確実な意識を持っているのに対し、韓国については複雑な感情を現わす。韓国人俳優のベ・ヨンジュンやウォン・ビンについては言及しながらも、韓国という名前は使ってはいけないのである。韓国人にとって北朝鮮ではなく、北韓であるのと同じように、彼らにとっては韓国ではなく、南朝鮮なのである。しかし「今は徐々に習っていく過程だというか、いろいろな人に会うと自分の中で韓国という国を認められるようになってきたし、身近に感じられるようになった」(1-14) 学生もいるのである。

第三は南北統一であり、これは映画全般を貫いて現れる問題意識である。学生たちは北朝鮮の視点からこの問題に接近する。学生たちは運動会のグラウンドに北朝鮮の旗をかけながら、「この旗がいつかは統一旗になる」(1-10) 希望を語る。修学旅行でみた板門店の 38 度線をみて悲しみ、「同じ民族、顔も同じで言葉も通じるのに、銃をもって対立し、戦わなければならない」(1-14) ことを嘆く。彼らが異国で差別されながらも民族性を保って生きていこうと頑張っている状況の根源には、南と北に別れた祖国の現状がある。そこで朝鮮半島が一つに統一されることこそが彼らの問題を根本的に解決する道なのである。

キムの映像には彼らの意識に対する批判的視線や韓国人としての分別はみえない。キム自身が彼らの理念や思いをどれほど共有しているのか否かも全く表現せず、彼らの意見を映像に伝えるだけの姿勢を取っているのである。彼のこのような姿勢は、最初の企画者であるチョが朝鮮学校に撮影協力の願いの手紙で書かれた思いを受けついた結果であるかもしれない。つまりチョが韓国人たちに「この子供たちが韓国人たちとはなんの関係もない日本に住む北朝鮮学校の子供たちではなく、我々の子供であること」を知らせ、この映画で「韓国と朝鮮学校をつなぐ小さい橋になりたい」と思ったことが、キムによって映像化されたのである。

韓国人はどういう視線でこの映画をみて、どのような感想を持ったのだろう。「韓国」と「朝鮮学校」をつなぐ橋になろうとしたチョの思いはキムの手によってどのように実現されただろうか。韓国インターネット・ポータルサイト「ネイバー」の映画コーナーの『ウリハッキョ』評価欄⁷をみると、この映画は評論家だけではなく、観客からも高い評価をうけている。また2015年6月26日の日付で426件の読者レビューが書かれていた。

観客の映画の受けとめ方を分けた一つの基準点はイデオロギーであった。この映画を南北対立によるイデオロギー対立として解釈した観客が概ね批判的であったのに対し、イデオロギー対立より同じ民族の物語として受けとめた観客からは好評を受けた。映画に高い評価をつけた人の多くが在日朝鮮人たちの状況を知らなかったし、考えたこともなかったと自責した。今まで無知で無関心だった自分が申し訳なく、恥ずかしく、良心が痛むと告白したのである。この映画は観客自身の生活や自己アイデンティティだけではなく、民族や統一について改めて考えるきっかけにもなったのである。

映画に好評的なレビュー(表2:読者の賛成が多かった上位20件)においては「この映画の焦点は民族性を守るための彼らの美しい抵抗にある」(表2-1)(以下「表」

⁷ ネイバーの『ウリハッキョ』 ページ <http://movie.naver.com/movie/bi/mi/basic.nhn?code=63445>

省略)とし、「この映画をみながら何回も涙を流し、一体民族が何かについて疑問をもった」(2-4)のであった。

また「遠い日本の地で苦勞しながら生きていながらも明るく笑うその子供たちの姿で、長い間分断されているが、南と北で離れて生きる私たちも結局同じ民族、同胞、家族であることを切実に感じた」(2-13)し、これらの問題を可決するには「早く統一すべき」(2-10)と主張した。

そして「お互いが力になって一緒に生き、自分たちのアイデンティティを守り、自分の信念を信じて貫く姿は、韓国だけではなく、普遍的に認められる価値」(2-6)であるとしながら、「韓国では無くなった永遠な母校」(2-8)を朝鮮学校で見つけたのであった。

一方で映画に批判的な意見(表3:読者の賛成が多かった上位20件)としてはドキュメンタリー映画としての完成度に関するもの、また作り手の政治的偏向性に対するものであった。在日朝鮮人が同じ民族であることは認めるが、彼らが北朝鮮寄りで、それを擁護する監督の態度は間違っているというものである。そのため「理解も共感も出来ないし、北韓を宣伝する映画にしか感じなかった」(3-1)し、「公正性と客観性が欠如されているがゆえに、ウスペラな民族主義感性でバランスを失い、しっかりした現状を伝えてない」(3-4)と主張するのであった。この映画は「朝鮮学校の教育内容が北朝鮮式で金日成父子を賛美している」(3-14)ことを無視した「北朝鮮煽動物にすぎない」(3-3)というものである。

さらに批判的視点は民族というものへの疑問と映画が在日朝鮮人の問題を民族主義的な観点で捉えたことについて言及している。「民族を血ではなく、文化の共存であると思う立場からすると、みんなの民族に対する執着が恐ろしかった」(3-12)し、「一次元的な感情線を刺激する民族性なら要らないし、この映画は結局、民族イデオロギーへ感性的に訴えることで、ショー・ビジネス的ドキュメンタリーに転落した」(3-16)のだと主張するのであった。

3. 映画から始まった市民サークル活動と新しい三者関係

近年、毎年数百万単位⁸の韓国人が観光、ビジネス、留学などの理由で日本を訪ねている。彼らは外国人として日本国が許す範囲での活動を個々人の目的によって自由に行うことができる。しかしながら一般の韓国人が自由に朝総連関連施設を訪ねたり、その関係者に会うことはできないとされている。それは日本政府によるものではなく、韓国政府から韓国人に要請されることである。そのため、朝鮮学校を訪問するには事前に韓国政府への申告ないし政府の許可が必要とされる。このような状況下で一般の韓国人と朝鮮学校関係者を含め、総連関係者とが会うことは稀なことであったし、あぶないことだともされてきた。

それゆえに映画がきっかけで始まった市民活動として、一般の韓国人と朝鮮学校の関係者が集まったことの意味は大きい。彼らの出会いは同じ民族としての互いの存在を再確認することであるし、歴史的、政治・社会的問題が再照明される場面であるし、日本を入れた3者の関係と役割が模索される機会になったのである。

3-1. 韓国人：「モンダン鉛筆」の会員

『ウリハッキョ』を観た観客の映画に対す解釈や反応は様々であったが、映画のファンクラブに集まった人々の視点も同じく多様であった。ファンクラブの活動は「モンダン鉛筆」での日本にある朝鮮学校との交流と朝鮮学校のための活動に合流されていた。

モンダン鉛筆の会員に対するインタビューでは、映画『ウリハッキョ』と「モンダン鉛筆」に関する焦点インタビューが行なわれ⁹、彼らの映画に関する感想や

⁸ 2015 年は 400 万人を越え、過去最高の記録になった。

⁹ インタビューの質問は 1「この映画で最も印象的な場面はなんでしたか？」2「その理由はなぜですか？」3「この映画を通して新しくわかったことはありましたか？」4「ウリハッキョと聞くと何を思い浮かべますか？」5「橋本さんのインタビューのシーンを観て、あなたはどう思いましたか？」6「モンダン鉛筆に参加した動機はなんですか？」7「モンダン鉛筆でなにを最もしたいですか？」8「モンダン鉛筆はどういう活動をすべきだと思いますか？」全体的には自由な対話の中で以上の質問をはさむ形式で行なわれた。

市民活動に参加した動機と期待が問われた。「モンダン鉛筆」の会員であり、ファンクラブの前代表を努めたキムは「我々の視線は概ね『学校のあり方』『韓半島統一問題』『在日の共同体形成と維持』などに集中している」(表 4 K.H)と話した。

「以前は在日朝鮮人の存在を強く意識したことも、彼らの歴史や状況に対する知識もなかった」(表 4 K.K、K.S、P.S)ことが語られた。「同じ血をわけた民族を発見し、申し訳ない気持ちでいっぱいだった」(表 4 P.S) という。そこには「自分たちが当たり前所持している国籍で悩み、不自由を強いられている同胞がいて、彼らは差別的な日本社会の中で民族の言語と文化と歴史を誇りとして守ってきた」(表 4 K.K)のである。

韓国の学校の現状に強い問題意識を持ち、代案学校を模索してきた人は、「朝鮮学校で韓国の学校の子供より純粋な子供たちの姿を発見し、韓国が現在抱えている教育問題と比較しながら、解決のヒントを得よう」(表 4 P.S)とした。また「韓国社会における共同体の結成と活動に関わる人からすると、60 年以上も朝鮮学校を中心に共同体が結成・維持されてきたことは一つのモデルケースとして研究すべき対象になりうる」(表 4 K.H)のであった。

そして南北の政府や政治機関の関係が膠着しているなか、「民間のレベルで総連系の人々と対話し、交流を活性化することが、将来に達成すべき民族統一への第一歩になりうると信じている人もいる」のである(表 4 K.H)。

日本にいる在日コリアンは多様に区別されるが、「モンダン鉛筆」は自らの関心を敢えて朝鮮学校に関わる在日同胞に集中させている。日韓関係、南北関係、総連と民団、日本社会と在日コリアンの関係といった大きな関連性の中で、韓国と在日朝鮮人(総連系の在日コリアン)の関係をどのように規定し、築いていくかが、「モンダン鉛筆」活動の基になっている。キム(2014)¹⁰は「モンダン鉛筆の心は『罪意識』から出発する」もので、その理由は「去る 60 年余の間、我らの父と母たち

¹⁰ 김명준(2014). 방분단여러분께 드리는 저의 호소!!! 길지만 반드시 읽어주세요.
To visitors!!! long text, but read surely.
mongdangpencilcafe. <http://cafe.daum.net/mongdanglove/TIJD/60> (2014.9.14)

が生きていくのに忙しくて、我らの政府が在日同胞を放棄してきたからであり、子供たちの親と祖父たちが日本人から受けてはならない不当な差別と抑圧に苦しめられ、半世紀がすぎる間、私たちはなにもしなかったからであり、我々は『罪意識』から少しでも脱出するために、子供のためにいろいろ準備するのである。…韓国人側は在日同胞に政治的な変化を求めることも、下手な希望を与えることもしてはならず、ただ彼らの側に付き添い、彼らが求めることをすることで力になってあげるしかない」と訴えている。

『モンダン鉛筆』はその規模からして、韓国社会において非常にマイナーな存在である。しかしながらインタビューの結果から会員たちの多くが緩やかで大きな物語を共有していることがわかった。その物語は自分たちが忘れていた同胞の発見と関係の再構築による再結合への夢である。それは歴史の過去、現在、未来を見直す作業であり、イデオロギーのギャップを乗り越える試みであり、現存する矛盾に対する告発である。

韓国と日本の社会において朝鮮学校そのものが非常に政治的な文脈で受けとめられがちなため、「モンダン鉛筆」としては彼らの活動が政治の場になることを警戒している。しかしながら非常に政治的なテキストをもって、政治性抜きを主張する彼らの活動は時には自己矛盾的な状況を演出するのである。

3-2：在日コリアン：朝鮮学校の関係者

朝鮮学校の関係者の間には韓国人との交流活動についていろいろな意見がある。しかし4回にわたって訪問団を受け入れたことは、朝鮮学校の公式的な立場として、この交流を肯定的に受け入れていることを示しており、時代による政治的動向の変化や社会的要求に適応していこうとする態度の表れであるといえる。

朝鮮学校の関係者四名に対し、映画『ウリハッキョ』と「モンダン鉛筆」につ

いて焦点インタビューを行なった¹¹。

関係者にとって『ウリハッキョ』の内容自体は彼らの日常なので、特に珍しいことでも感動することでもなかった。むしろ韓国人が自分たちの生活を映画にしたこと自体がびっくり」(表 4 P.Y, K.Y)であった。「モンダン鉛筆」がまとめて送ってくれた映画観客のレビューをコピーして、みんなが読んだ時は、そこに書かれた言葉にさらに驚いた。何人もの人が、「一晩中泣いたし、今まで韓国人に閉ざされていた心がすこし変わった」(表 4 P.Y)のである。『ウリハッキョ』を通じて韓国人が在日朝鮮人を発見したのと同じように、彼らはこの映画に対する韓国人の反応を通じ、自分たちに共感する韓国人たちがいることを初めて知ったのであった。植民地時代と朝鮮戦争を経て、異国に生きる同胞の存在を無視し続けてきた韓国人に対する警戒心が無くなったわけではないが、戸惑いを覚える。韓国人との交流によって「子供たちが韓国に影響されることを全く考えてないわけではないが、学校の外では韓流などで子供たちは既に接しているから、大きな心配はない」(表 4 K.Y)のであった。この交流で「政治的な解決や経済的な後援を望んでいるわけでもない」(表 4 R.D)。ただ自分たちの立場を理解し、応援し、力になろうとする韓国人との交流を受け入れている(表 4 R.D)のであると語った。

韓国人と朝鮮学校の関係は政治的な意味において大変難しく、時には危なく、非常にデリケートさを要するものである。韓国政府の在日朝鮮人に対する政策や態度は政府の政治的性向によって変わる。「モンダン鉛筆」の活動が韓国政府から許可される範囲で動いているのと同じように、朝鮮学校は朝鮮総連の下で動いている。お互いはその政治的境界線を十分認識し、その線にふれないところを探りながら、相手を理解していこうとしているのである。

¹¹ インタビューの質問は1「この映画を観た時、どんな思いがしました？」2「その理由は何ですか？」3「韓国人の反応をどう思いましたか？」4「最初モンダン鉛筆会員との出会いをどう思いましたか？」5「現在はモンダン鉛筆との交流をどう思いますか？」6「モンダン鉛筆との交流はどのような面で必要ですか？」7「モンダン鉛筆の活動に期待することはありますか？」全体的には自由な対話の中で以上の質問をさむ形式で行なわれた。

3-3：日本人：朝鮮学校を支えるグループ

韓国人と総連系の在日コリアンは常に韓国と北朝鮮の關係に強く影響されてきた。お互いが接近することは、時には民族統一の一つのきざしであると思われたし、時には違法な出会いとして抑制された。「モンダン鉛筆」の広島訪問に際して、この不便な關係の間で、緩衝的役割を果たしたのは日本の「教職人組織」である。総連関連の組織と明らかな接触を好まない韓国政府も日本人が間におかれていれば名分が立ち、訪問の許可が出せるのである。「モンダン鉛筆」の広島訪問は、韓国と総連との2者關係の間に日本人組織を介在させ、円満な3者關係にした上で成り立った交流であった。実際には広島地域において民族教育権の保障から近年の高校無償化問題まで、日本政府と朝鮮学校の間に立ち、長い間關係改善に努めてきた日本人教職員のグループ¹²が関わっていたのである。彼らは韓国訪問団の公的な受け入れ先としてだけではなく、コンサートなどの事前の準備にも積極的に加わった。

広島の日本人教員らの問題意識は「日本の学校に通う在日コリアンの児童たちをどう扱い、どう教育していくかから出発していた。差別されるマイノリティーに対する同情心で彼らに何をしてあげるべきか」¹³の思いで始まった。しかしながらいろいろな事件や時代を経ながらこの問題に対する教員たちの態度は変化してきた。自分たちは「弱者のために働くのではなく、健全な日本社会を守るために働いている」(表4 Y.Y)という意識へと変化したのである。「広島に朝鮮学校が存続することは、この地域の多様性と平和の価値が守られている証であり、日本の子供たちが多文化共存を体験する得がたい機会になると言うのである」(表4 Y.Y)。またこのような組織は広島に限らず、日本全国のネットワークとしてマイ

¹² この広島教職人グループの代表者とのインタビューは広島における在日コリアンに対する教育と活動の歴史、またこのグループがモンダン鉛筆の広島「ソブン」に関わった経緯と役割について説明してもらう自由形式のものであった。

¹³ 民族教育の未来を考える・ネットワーク広島(2013)「学習資料」広島における民族教育の保障を求める取り組みについて

ノリティーとしての朝鮮学校を支える役割を果たしている。

5. 終わりに

『ウリハッキョ』は韓国人に朝鮮学校の状況を伝え、新しい見方を持つように要求した。日本にいる在日コリアンの中でも、最も韓国人とは遠い存在であった彼らを同じ民族、同じ同胞として受け入れるように訴えたのであった。映画はそれを接した韓国人に自分自身のアイデンティティや民族性、祖国や統一、学校のあり方などについて改めて考えるきっかけになった。ある人は朝鮮学校の人々に対し自省の念をもち、ある人は映画の偏向性を非難した。受けとめ方の違いはこの映画をイデオロギー的観点で解釈したか否かに最も関わっていた。映画の理念に共感する人たちが中心になって作られた「モンダン鉛筆」は韓国の中でも朝鮮学校を支える活動をしながら、毎年「ソブン」という名で、朝鮮学校を訪問し、彼らとの直接的な交流を続けている。

在日コリアンの存在は韓国と日本の歴史の一部である。韓国と日本において20世紀前半が欲望と悲劇のものであり、それが現在においても韓国と日本と在日コリアンを覆う陰であるなら、三者間の問題を克服しようとする意思と実践こそ、歴史への和解と未来への展望になる。しかしながらこの三つの社会はそれぞれが多様な思想と理念と利益で複雑に分裂し、多種多様な関係性を作り出しているため、解決の道は単純には見つからない。

理念や利益が対立する集団の間ではしばしば衝突が起きる。その直接的な衝突を和らぎ、次の可能性を開くには、対立の軸をずらし、緩衝的役割をする存在の介入が必要である。「モンダン鉛筆」は韓国と在日朝鮮人を和解させる役割を果たそうとしている。「日本人教職人グループ」は理念が対立している韓国と在日朝鮮人、またマジョリティーとしての日本社会とマイノリティーとしての朝鮮学校の間を仲介している。朝鮮学校を含む在日コリアンは韓国と北朝鮮と日本がオーバーラップされる存在として多くの潜在的な可能性を持っている。しかしながら実

際の実況がすべて明るい側面だけを持っているわけではない。もし三者関係が閉ざされたものになれば、お互いに対するイメージは歪められ、膠着的なものになる。韓国人が在日朝鮮人を「差別されるかわいそうな人々」であることだけを前提にし、在日朝鮮人が韓国人を「自分たちを助けてくれる人々」として接することはこの活動を歪曲する。またその閉ざされた関係はほかの集団や政治体制について偏狭で不公平な意見を持ち、対話する相手ではなく、敵対すべきものとして捉えさせる恐れがある。それゆえ、三者間の信頼関係と外部に開かれた態度がこの活動が萎縮せず、実際的な成果が得られる必要前提になる。

それぞれが各々の社会においてマイナーな存在なゆえに、大きい局面で彼らが果たせることは非常に制限され、成果は彼らの関係の中でしか確認することができないかもしれない。しかしながら彼らの存在意義は成果の大小ではない。特にナショナリズムが高潮し、国と国が衝突し、多くのことが国家レベルに回収される時期、または大きい理念がマイナーな意見を抑圧する時、国を跨いでつながれた人々の関係や国境を越えて成立するマイノリティーの連携は、国と国の衝突の軸をずらし、社会の多様性を保ち、別の展開を開ける可能性になるということである。

引用文献

- 김종갑(2008). 90년대 이후 한국 독립 영화 연구-비디오 액티비즘과 미디어 액티비즘을 중심으로-. 동의대학교 영화영상학과 석사학위논문
(Kim Jong Kab. (2008) Study on Korean Independent Film since 1990: Focusing on Video Activism and Media Activism. A Paper for M.A. of New Media & Visual Technology, Dong-Eui University. Busan. Korea)
- 김수남(2005). 한국 독립 영화. 살림출판사
(Kim Su Nam. (2005). *Korean Independent Film*. Seoul: Salim)

정헌(2013). 영화역사와미학. 커뮤니케이션북스

(Chung, Hyun. (2013). *Film History and Aesthetics*. Seoul: Communication Books)

門間貴志(1994). 日本映画のなかの在日像, 李鳳宇(1994). 「月はどっちに出ている」をめぐる 2、3 の話. 社会評論社, p213-p232

李鳳宇(1994). 「月はどっちに出ている」をめぐる 2、3 の話. 社会評論社

梁仁實(2004). 戦後日本の映像メディアにおける「在日」表象—日本映画とテレビ番組を中心に—『立命館産業社会論集』第 40 巻第 2 号

表 1

		タイム		場所	形式	内容
冬	1	0.0.27-0.0.54	イントロ	札幌の街 職員室	字幕	朝鮮学校の歴史
		0.0.55-0.2.24				イントロ 映画の経緯説明 雪のため、始業式延期
	2	0.2.25-0.2.42	タイトル		文字	ウリハッキョ
	3	0.2.43-0.3.30		教室		朝鮮人としての自覚
	4	0.3.38-0.8.25	始業式、 入学式	講堂、 教室、 職員室		教員の新学期学習目標、教員としての態度
						学校の説明 入学式の様子、担任発表 朴先生はどんな人?
	5	0.8.26-0.10.4	合唱大会	教室		合唱練習、高3のクラスの様子
	6	0.10.5-0.21.44	学校生活 ハングル	教室、 廊下、 校内		ハングル使用について 制服着用—チマチョゴリと プレーザー 学習風景

ドキュメンタリー映画『ウリハッキョ』をめぐる三つのコミュニティの考察：
韓国、日本、在日コリアン社会のダイナミズム

春					学級自律 ハングル使用運動、ハングル口 演大会
	7	0.21.45-0.29.43	寄宿寮生 活	寮	寮の歴史、寮生活、寮生の親 30名くらいの寮生 寮生活、娯楽、パーティー
	8	0.23.9-0.36.44	合唱大会	講堂、 教室	合唱大会の様子
	9	0.37.33-0.42.19	編入 ハングル	教室	日本学校からの編入生のハング ル学習 朝鮮人としてのアイデンティティ と朝鮮学校 ハングルを使うこと
	10	0.42.20-0.54.01	大運動会	グラウ ンド、 教室 住宅庭	6月の運動会の様子、統一 バーベキューで1世、2世が語る 朝鮮学校
	11	0.54.02-0.57.23	家庭訪問 学生リク ルート	札幌の 街、車の 中 飲食店	夏の家庭訪問と学生の募集 親としての心境
夏	12	0.57.24-1.19.33	スポーツ	グラウ ンド 合宿所	朝鮮学校のサッカー、朝鮮学校 の運動部 日本人のサッカー・体育教員 大会向けの練習と参加様子と 資格 1-4 夏のサッカー合宿 サッカー大会、北海道地域予選

秋 冬	13	1.19.34-1.29.09	教員生活	新婚宅、 校内 登校道		朴先生の結婚式、結婚パーティー 李先生とハングル検定試験 朝鮮学校を支援する会 日本学校教員との交換授業 右翼のハラスメント
	14	1.29.10-1.53.01	修学旅行	教室、新 潟ホテル 新潟道 路、埠頭 マンキ ョンボ ンホ 北朝鮮 板門店		祖国訪問、国籍問題 韓国政府の在日同胞政策 朝鮮人としてのプライド 北朝鮮・韓国に対する思い 分断と統一
	15	1.53.02-1.57.50	学校の様 子	校庭、校 内		雪かき、大学入試準備、終業式 李先生の最後の授業、臨終
	16	1.58.56-2.7.30	卒業式	講堂		卒業式の様子
	17	2.7.31-2.9.40	その後	校内		その後の朝鮮学校の様子を伝える シン先生から手紙
	18	2.9.41-2.9.56		字幕	字幕	在日朝鮮人の教育の歴史
	19	2.9.57-2.11.38	E・ロール		字幕	スタッフ、関係者、感謝の言葉

ドキュメンタリー映画『ウリハッキョ』をめぐる三つのコミュニティの考察：
韓国、日本、在日コリアン社会のダイナミズム

表 2

	タイトル	推薦	キーワード
1	目頭が赤くなる感動的な映画です	403	民族性、アイデンティティ、愛国
2	淡々としているあなた、しかし私は淡々としてられない	371	民族性
3	ウリハッキョのような小さい映画には評価点悪戯しないほしい	142	評点、我々の痛み
4	民族は存在するのか？	69	民族
5	我が国だけの名作なので一回観てみませんか？	61	民族性、分断と統一
6	みんながみんなを引っ張り上げている美しいウリハッキョ	56	教室共同体
7	ウリハッキョ（A+）	51	学校生活、民族
8	永遠な母校がありますか？	40	我々、民族
9	わが町でも上映してください	29	韓国の国民性、映画界の現状
10	はあ〜まずなんと言ったらいいやら	26	統一
11	堂々とした彼らが好きだ。	16	民族
12	守りたいものを守り抜く	16	我々、アイデンティティ
13	ウリハッキョに遊びにきてください！	15	民族、統一
14	これ、製作意図が怪しい	12	民族性、血統、北韓
15	映画を観る間ずっと狂いそうだった	9	民族、民族性
16	ウリハッキョ…みんなが観るべきジンとする物語	9	民族、政策
17	なぜ私たちは彼らの祖国になれないのか	7	祖国、アイデンティティ、政治
18	韓国人なら必ず観るべき映画に追加します	7	学校、情、祖国、ハン民族
19	ウリハッキョはウリハッキョである	7	感動、統一
20	ありがとうございます	6	民族

表 3

	タイトル	推薦	キーワード
1	感動だと評価が高くてみた映画		北朝鮮
2	安保意識が低すぎるのではないか		北朝鮮・総連
3	北体制の宣伝煽動物にすぎない	1	総連
4	スタイルだけ変えた軍事独裁政権時の民主主義新派劇	5	民族主義・総連・民団
5	ウリハッキョ		民族
6	全体を一緒にする民族性を守っていけるように		民族・北朝鮮
7	人共旗が統一旗になるんだと？	5	南北・民族
8	日本でも続く北朝鮮式画一化教育、焦れたい思 いしか…	5	北朝鮮
9	星をあげたくない…撮影監督の…	3	メッセージ
10	在日コリアンの未来は？	3	南北・民族性
11	半端な民族愛を強要する映画	2	民族性
12	私たちという言葉が持つ恐ろしさ	2	民族
13	朝鮮はない		朝鮮・祖国
14	金日成・金正一の写真が掛けられていましたか？		北朝鮮・総連
15	ウリハッキョ（キム・ミョンジュン）この映画は けっして…		民族性
16	ショー・ビジネスっぽいメロドキュメンタリー、 私たちだけの		アイデンティティ
17	退屈だ		
18	総連がなぜ恐いかわからないのか、じゃなければ		スパイ
19	ウリハッキョ		祖国
20	これ、製作意図が怪しい（表 1 と重複）	12	民族性・血統・北朝鮮

ドキュメンタリー映画『ウリハッキョ』をめぐる三つのコミュニティの考察：
韓国、日本、在日コリアン社会のダイナミズム

表 4

	所属	名前	性別	インタビュー日
1	モンダン鉛筆	K. H	男	2014. 8. 16
2	モンダン鉛筆	K. K	女	2014. 8. 16
3	モンダン鉛筆	K. S	男	2014. 8. 16
4	モンダン鉛筆	P. S	女	2014. 8. 16
5	朝鮮学校	K. Y	男	2014. 7. 25
6	朝鮮学校	P. Y	女	2014. 7. 25
7	朝鮮学校	K. Y	女	2014. 7. 25
8	朝鮮学校	R. D	男	2014. 7. 26
9	呉・朝鮮問題研究会	Y. Y	男	2014. 7. 25